

# Dear地球民

第21号  
1999年6月発行

編集発行 ゆがわら国際交流協会  
☎259-0303 神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1  
湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111

## 豪州ポートステューブンス訪問記 — 姉妹都市提携に立ち会って —



ゆがわら国際交流協会 副会長 高橋 一子  
副会長 金井文江

ポートステューブンスの市民が湯河原を訪れ、あたたかい交流が行われて一年。両市町の関係をより深いものにするため、町関係者とともにオーストラリアの大地を踏むこととなった。

### 1 ポートステューブンス市庁舎訪問

バスはゆったりとした住宅街に入った。やはり大陸が違うなと思った。とある建物の前でバスは停車した。総ガラス張りの2階建だ。これが市庁舎だと知らされてビックリした。とてもそんな感じではなかった。内部は人影がまばらでガラーンとしていた。

議場などを見学した後、私たちは料理が並べられた部屋に通された。市主催の昼食会が用意されていた。和気あいあいとした雰囲気でのパーティーは進んだ。特に印象強かったのはゴミ処理場システムについての説明だった。ゴミの分別収集の徹底と生ゴミをバイオの力で発酵させ、肥料として供給させるプロジェクトが組まれており、これは世界でも3ヶ所だけのことだ。



「姉妹都市提携書」の調印に臨む湯河原町の横井助役とポートステューブンスのポートレット市長

## 2 ユーカリの記念植樹

市庁舎を後にして、市営のワードパークに案内された。ここはワラビーなどの小動物が放し飼いになっている動物園だった。私たちは動物たちと戯れた後、訪問者全員に1本づつユーカリの木が配られ、ここで記念植樹をした。いつか再訪問する時の楽しみが増えた。その後、リサイクルセンターを見学した。

## 3 イルカ・ウォッチング・クルーズ

翌朝9時30分、ド・アルボラ・マリーナからクルーザーに乗船した私たちは、ポートスティーブンス最大の呼び物、イルカウォッチングに出掛けた。湾内の海はゴミひとつ無く、どこまでも澄んでいた。20分程して2、3の魚影を目撃、イルカだ。その中、ゾクゾクと集まってきた、船の周りをイルカに取り巻かれてしまった。

## 4 トマリー教育センター訪問

湯河原の小学生たちの絵画を持参した私たちは、2カ月前に開校された新築の学校を訪問。この学校は5才から18才までの二千人の子供達が学んでいる。

とにかく広い。大きな校舎、校舎と校舎の間隔が広く、学生達の姿はまばらに見える。

97年秋に送った湯河原小学校の子供達の絵画が展示されている校長室で、センターの説明を受けた後、応接間に通されて驚いた。壁一杯に飾られた湯河原の子供達の絵画に感激した。帰りに校長先生から、ポートスティーブンスの子供達の絵画を渡された。帰国して、早速各学校に展示することを約束した。

## 5 姉妹都市提携調印式

トマリー教育センターを後にした私たちは、市営プール、ハーバーサイド・リタイアーズビレッジを見学、ホテルに帰った。いよいよ調印式だ。

調印式会場に当てられたホテル・レストランで、厳かな中にパトリック・ポートスティーブンス市長と横井湯河原町助役が、姉妹都市提携書に調印をした。場内は歓声に包まれ、肩を抱き合う人達の姿もあった。1998年11月13日、ポートスティーブンスと湯河原が共に歩む、新たな一歩が始まった。



校長先生に湯河原の子供の絵を託す金井・高橋両副会長  
トマリー教育センターにて



その後はなごやかな中に爆笑も交えて、和気あいあいに懇親会が進んで行った。特に、議員の一人が持参した日本の珍味は、向こうの人達に大受けて、食べ物に対する興味は万国共通なんだと、認識を新たにした。

姉妹都市提携書の調印は、大きな喜びだ。これで、私たちの長年の努力が身を結び、肩の荷が降りたと同時に、感激で胸が一杯になった。残りの日程をリラックスして、心から楽しむことができた。

## 6 新たな未来に向けて

調印を折りに今後、両市町の間で、教育、文化、行政など様々な分野で交流が進むと思う。湯河原の子供達を送るにも、ポートステープンスは抜群の環境である。青少年の行き来も盛んになるだろう。ふたつの町の交流が、新しい世界、新しい地球民を生む原動力となることを希望する。



トマリー教育センターの日本語教室  
生徒達が「こんにちは」と声をかけてくれた

### 【活動報告】

外国語講座 英語(後期)... ボーダン・コミック先生(シドニー出身) 2・3月の月曜計5回開催  
海外都市との交流

昨年11月に、高橋、金井両副会長が豪州ポートステープンスを訪問の際、トマリー教育センターの5～11歳の児童の絵画50点を託されました。これらの絵画は、町内の三つの小学校で巡回展示され、湯河原の子供達が熱心に鑑賞しました。97年秋に始まった児童の絵画交換が、いよいよ本格化。

### '98クリスマス会

12月22日夜、スタジオ千夢にて。委員会ごとの役員の出し物に、会場は爆笑の渦。

### 募金協力

クリスマス会チャリティーオークション売上金 ¥56,011 を下記へ募金いたしました。

NESA ネパール教育支援の会.....	¥15,000
アプサラ・プロジェクト2000(カボリアの教育支援)...	¥12,000
シャプラニール=市民による海外協力の会.....	¥10,011
あしなが育英会.....	¥10,000
ガルコトウワ基金(スリランカ農村開発).....	¥9,000



ようこそタイの皆さん

1999. 4. 24~26

~ウボン教育大学の先生方をお迎えして~

「大人」のグループを受け入れるホームステイ交流が、初めて実現しました。東京にあるアジア交流研究所（アジアとの国際交流、国際協力を行っている非営利の公益団体）から、「4月にタイの大学の先生たちが研修に来ます。より深く日本を理解していただくため、ホームステイをお願いできませんか。」と依頼があったのは、昨年11月のことでした。ところが、パーツ暴落に続く経済危機の影響で、国家公務員である先生方に、渡航許可が下りません。当初予定の3分の1の8名だけの来日が決まったのは、3月も半ば。それからホストファミリー募集と、慌ただしく準備にかかりました。

今回、湯河原で2泊のホームステイをしたのは、タイ東部、ラオスやカンボジアに近いウボンにある教育大学の、副学長はじめ、外国語学部、芸術学部の先生方。お一人を除き、日本は初めてです。東京での大学訪問、京都・奈良の寺院視察を含む、10日間の日程の中で、先生方が一番不安に思っていたこと....実は、それがホームステイだったそうです。

肌寒い雨の土曜日、震えながら湯河原駅に降り立った先生方を迎えたのは、歓迎のプラカードを手にしたホストファミリーの笑顔でした。対面式では、米岡町長、鈴木教育長からも、暖かい歓迎のお言葉をいただき、それぞれのホストファミリーのもとへ。日本の家庭“第一夜”は、家族と一緒に食卓を囲むことから始まりました。同じ「お米の国」の住人、日本食はもちろんO.K.です。







「茶道には、日本の心が凝縮されていますね」  
ご指導いただいた杉山先生を囲んで

翌日は、前の晩からは信じられないほどの青い空。ホストファミリーと共に湯河原巡りです。先ずは一路、大観山へ。“富士山・桜・温泉”が見たい物ベストスリーだったそうで、ここで、芦ノ湖ごしの富士山の眺望を満喫するはずだったのですが、どうしたところか富士山の所だけに雲がかかっており、裾野からその雄大な姿を想像するにとどまりました。でも高所ゆえ、遅い八重桜を見ることができました。続いて「湯河原ゆかりの美術館」にて、竹内栖鳳らの日本画とドーミエの版画を鑑賞。「絵も施設もすばらしい」と、大変気に入った様子でした。

さて、手作りのお弁当は、星ヶ山でいただくことになりました。空気も澄んで、湯河原の町と真っ青な相模灘、真鶴岬を眼下に望み、会話が弾みます。役員の永山さんが、津軽三味線の演奏に駆けつけてくれ、皆の心は、手拍子で一つに結ばれました。吉浜海岸で波と戯れた後、お茶会を体験しに、杉山副会長のお宅へ。お母様の杉山ひで子先生に、お茶の作法をご指導いただきました。お茶を味わい、茶道の歴史、茶室、茶道具についての解説を聞き、日本文化の奥深さに改めて感じ入ることになりました。初めて見る着物や袴も印象的でした。

その後、温泉場へ。ホストファミリーの相澤さんが経営される旅館「大観荘」を訪れ、浴場と源泉を見せていただきました。暑いタイでは、お湯に入る習慣はなく、また大勢で入る湯船ありませんから、噂に聞いていた日本の温泉は、まさに驚きでした。

湯河原で二晩を過ごした一行は、翌朝ホストファミリーの見送りを受け、奈良へ向かいました。関西滞在中も話題に上るのは、もっぱら湯河原の家族のことばかり。離日前夜の送別会でのウォンセナ副学長の挨拶は、「特に湯河原での人々のあたたかさは、一生忘れません。とてもいい経験ができました。」という言葉だったそうです。

寛大な心と親しみを持ってもてなしてくれたホストファミリーとの出会いは、先生方にとって、旅の一番の収穫になったことでしょう。今回のような草の根の交流が、日タイ両国の相互理解を深める、最良の手段に違いありません。ご協力いただいた皆様、そして何よりもホストファミリーの8家族に拍手！



山田さんは、'97年12月にポートスティーブンスの市民41名が湯河原を訪問した際、ジョン・バートレット市長のホストファミリーでした。その後も親しい交流が続き、今度は同市で開かれた全豪の姉妹都市会議に、市長からご夫妻で招待を受けました。



## ポートスティーブンス市で開かれた “ASCA”に参加して

山田 明美

1998年11月末、寒い日本から夏を迎えるオーストラリアに出かけました。クリスマス間近の明るい雰囲気、陽気な彼らをより一層暖かい印象にしていました。

ASCA (Australian Sister Cities Association

オーストラリア姉妹都市委員会)

今回、私達夫婦が参加したこの会議は、毎年一回、選出された都市でオーストラリア全土から、各市町村の議員や交流委員会のメンバー総勢200名以上が集まって、色々な情報交換などが行われるものです。4泊5日で行われ、1日目のパーティーでは名刺交換がにぎやかにくりひろげられ、日本との姉妹都市関係を結んでいる所も多く、非常に友好的でした。最近では中国も人気が高いようです。私達以外にもアメリカ、ニュージーランドからも参加していましたが、ゲストの世話は、すべてジョン・バートレット市長が行い、彼の頭の中は皆のスケジュールでぎっちり詰まっていた事と見事にこなしていました。

2日目からは「リーダーになる条件とは」、「どのように選び、どのように結ぶか？」などの具体的なレクチャーがありました。(私達には順子ブラデスさんが通訳してくれました。) その合い間にイルカのいる海を船で回ったり、ワイン農園での昼食など盛りだくさんでした。



ワイン農園での昼食は、ステークバイキング  
日本語が達者なバンパリーの女性議員と  
すっかり意気投合の山田さん



お別れの朝、お世話になったジョン・パートレット市長(中央)、ニュージーランドの議員とともに



この日の夜には、この一年間の活動報告が行われ、その結果ポートスチーブンス市が企画した「館山、湯河原の旅」が最優秀賞をいただき、トロフィーを手に入れました。また、姉妹都市紹介の展示コーナーでは、湯河原コーナーが設けられていて、こちらも最優秀賞を獲得しました。展示を担当したポートスチーブンス市姉妹都市委員会のジューン・フォーラー委員とノーラ・オコーナーさんは大喜びでした。お二人とも湯河原を訪れたメンバーです。

最終日には2000年の開催地を選出し、夜には、皆正装してダンスパーティーが行われ、別れを惜しみました。ポートスチーブンスの委員会のメンバーは皆、冗談ばかり言って笑いが絶えず、本当に家族のような気がしました。(皆さんホームステイ先の人々を懐かしがっていました。また会いたいと……)

ロンドン以来、私には2度目の海外旅行でしたが、前回は学生でしたので、社会人としての交流は又一味違ったものがあり、「国際井戸端会議」もなかなか楽しいものでした。このような楽しい旅ができたのも「ゆがわら国際交流協会」に参加したおかげと感謝しております。

願わくば、湯河原の子供達が、あの広い大地を踏みしめ、明るい空気を胸一杯に吸い込み、次世代の交流を続けて欲しいと考えます。ありがとうございました。



## サービスという言葉

現在の日本語には実に多くのカタカナ英語が使われている。サービスという言葉ほど日本に溶け込んでいる例は他にないだろう。大部分の人は別に違和感を持たず、自然に使用しているのだが、実は多少意味を間違えて使っている。

普通は値段を負けさせる場合例えば……もう少しサービスしなさいよ……

あの店はサービスがいいよ

と言うような使われ方のケースが多いのだ。

日本では全て受ける立場で使われる場合が普通である。これはすでに長い間日本語として使われているのだから、別に問題はないだろう。

ところが私も誤解をしていたのだが、辞書を見て驚いたことがあった。

例えば……明日のモーニング・サービスは何時に始まりますか？ と聞かれたとしたら、大部分の人は……喫茶店若しくは食堂での朝のコーヒーとパンと茹で卵のサービスを想像するのではないだろうか。

本当の意味は……明朝の教会の礼拝は何時には始まりますか？ 敬虔なクリスチャンの言葉なのだ。

つまり、辞書によると……奉仕、勤め、奉職、奉公、雇用、雇われること、等の意味が優先している。日本人が好んで使う値段を負けさせるサービスというのは出ていない。店のサービスが良い、悪いにも使われていない。その場合は値段を負けてくださいとか、客扱いがよろしいとかの表現で言われている。

軍隊に奉公する場合も……ミリタリ・サービスと言う。私も三年間サービスをしたことになるが、この言葉にはなじめない。従来の日本的な解釈からサービスしたとは言にくい。

このすっかり日本語化したサービスと言う言葉を外人に対して使ってもおそらく通じないのではないだろうか。

国際交流協会では毎年外国人へホームステイの形でサービスをしているが、何の見返りも期待しない完全な奉仕活動である。だからこれが本来のサービスであり、実行していたのである。

時代は急速に国際化しているが、文化、文明の違いはお互いに認め合って理解を深めていくしかないが、言葉の使い方の理解は本当の意味を取り違えると、誤解の原因になることは否めないだろう。

然し最近の役所の発行する書類には、やたらとカタカナ英語が氾濫している。外国人でもめったに使わない難しい言葉が羅列しているらしい。英語を使うと少しばかり、格好が良いとでも思っているらしいが、庶民に通じる言葉即ち日本語だけで良いのではないか。読む人は日本人なのだから。サービスとは国民に奉仕することであり、その意識が少ないのではないかと言う非難の声もあったが、かなり改善されてきたとの声もある。(石井立夫)